

## メアリ・ブラッドン「最後の舞台出演」

松岡光治(訳)

### 第一章 誘惑

「ならず者だぜ、あいつは」と紳士が言った。

「まあ、わたしの夫ですよ」と女性は答えた。

どちらの言葉も大した内容ではなかったが、いずれも心臓が張り裂けそうな、激しい感情で唇が青ざめた人たちから発せられた言葉だった。

「それが君の返事かい、バーバラ？」

「神様が許してくださる唯一の返事よ」

「君を悲嘆に暮れさせ、下劣な悪事で君の稼ぎを湯水のように使って、このむさ苦しい住まいに閉じ込め続けるつもりなんだぜ。ロンドン中が君の美しさと天賦の才能をほめちぎってるというのに。助かる道も、逃げる道も、残されてないのかい？」

「いいえ」と、彼女は相手を身震いさせるような表情で答えた。「逃れることになるわ——いずれ、棺桶に入ってね。わたしが受けた虐待も償われるでしょう——最後の審判の日に」

「バーバラ、今に殺されちまうぜ、君は」

「それって、あの人ができる最高の親切だと思いませんか？」

紳士は取り乱した様子で部屋の中を行ったり来たりし始めた。女性は

半ば悲しげな、半ば冷ややかな、何か異様な表情で暖炉の上にある細長い鏡の方を向いた。そして、ロンドン中に称賛の嵐を巻き起こした自分の美貌をじっと見ていた。

その変色した鏡が彼女に見せたものは何だっただろうか？ それは、毎晩の稽古に加えて苦悩の重荷でやつれてしまい、青白く、弱々しく見える小さな顔、そして黒い瞳にただよう暗い影であった。だが、この瞳ときたら！ 昼間の冷たい光の中では、彼女の小さな白い顔には、あまりに黒く、大きく、光かがやいて見えた。一方、ランプの光に照らされた夜の劇場では、彼女の瞳はその下の頬紅と、その中で燃え上がる才能の炎とで、かつてないほど観客の目を奪い、心を魅了した——芝居の目利きたち（特にホレス・ウォルポール）はそのように言っていた。バーバラ・ストウエルはコヴェント・ガーデン劇場に冠たる花形役者だったのである。

この有名劇場の舞台に立つのは二シーズン目だったが、彼女の美しさと才能はまだ新鮮味を留めて輝いていた。とはいえ、ロンドンの人々は彼女の昼間の姿を見たことがなかった。馬車に乗って拳闘場に来ることも、社交界の競売会場に姿を現わすことも、パルテオン民衆娯楽場の仮面舞踏会で崇拜者たちにとって謎の人物になることも、セント・ジェームズ公園に行って乳清ホエーを飲むこともなかった。要するに、彼女はどこにも外出することがなかったのだ。それで、ロンドンの人たちは人目に触れない彼女の生活について様々な噂を立てていた。しかしながら、真実を言い当てたものは一つもない。事の真相はロンドンの有閑階級が流す噂話の中でもっとも陰鬱なものよりもさらに悲哀に満ちていた。バーバラ・ストウエルが世間と距離を置く理由は三つあった。第一の理由は彼女の夫が暴君で、無法者で、びた一文も彼女には残して行かないことである。第二の理由は夫のせいで悲嘆に暮れていること、第三の理由は彼女自身が死に瀕していることであった。

この最後の理由は彼女自身にしか分かっていない。その胸の痛みは聴診器で探ることができなかった——単眼鏡と金の握りのステッキという出で立ちの堂々とした医者が往診に来て、死に至る病の進行具合については説明できなかった。だが、バーバラ・ストウエルは自分に余命いくばくもないこと、この上なく短い寿命であることが十分に分かっていた。

彼女は元気はつらつとした青春時代の真ただ中にいたわけではない。三年前、ハートフォードシャー州にある村の田舎牧師の娘として、人目につかない穏やかで幸せな生活を送っていた。しかし、運が悪いことに、ロンドンで婦人帽子販売の商売をしていた伯母を訪れた際に、その家で現在の夫であるジャック・ストウエルに会ってしまったのだ。彼はコヴェント・ガーデン劇場の大根役者——容姿だけはよかったものの、単純な人たちに効果てきめんの悪賢さを備えた心の冷たい悪漢で、言いようのないほどうぬぼれが強い男であった。うだつが上らない役者によくあるように、舞台監督こそ自分の不倶戴天の敵であり、ロンドンの観客は自分がロミオやダグラスといった一連の主役をすべて演じるのを見たくてたまらないのだと思っていた。それで、与えられた端役にすねてしまい、酒と博打ぼくちに慰めを求めた。ポウ街治安判事裁判所の管轄内で彼のように典型的な放蕩者を見つけようとしても、それは無理な話であった。しかし、この男は社交界で愛想よくふるまうすべを心得ており、「とても面白い奴」として通っていた。相手の情に訴えることができる技術があり、視線を天に向けて道義心や義侠心で燃え立つような男のふりをすることができたのだ。

バーバラは「白く塗った墓」のような男に清新な青春時代を無駄に捧げてしまった。この悪漢が彼女の少し風変りな美しさに魅了されたのは、彼女が田舎の英国女性というよりも、古いイタリアの絵画に見られるような美しい女性だったからである。人目を引く不思議な美しさはきっと

有名になるはずだ、このようなジュリエットであれば、自分もロミオ役できっと成功するぞ、と彼は考えた。心は新鮮さを失い、しなびてしまっていたにもかかわらず、この青年はできるだけ心を込めて彼女を愛してやった。結婚によって有利な立場になれると踏んでいたからに他ならない。それで、少しの説得とイギリス演劇から拝借した多くの甘美な台詞とで、彼は彼女の道義の障壁を打ちこわし、この涙もろい貞淑な娘に有無を言わせず、いかがわしい牧師が行なう秘密結婚を承諾させた。魔がさして承諾したことを悔やむ時間を彼女に与える前に式を挙げてしまったのである。

婦人帽販売人の伯母は荒れ狂った。というのも、彼女はストウエル氏が自分に懸想しているとばかり思っていたし、夫にしたいと考えるほど愚かではなかったものの、求婚者として引き留めておきたいと考えていたからである。ハートフォードシャー州の父も激怒し、「わしの知らない所で道を踏みはずし、永遠の破滅に向かったんだから、おまえが残り道の道をどう進もうが、わしの知ったことじゃない」と娘に言い放った。彼女には父と娘をもっと仲たがいさせたい義理の母がいたので、娘への溺愛から過ちを犯すことなど今まで一度もなかった父と和解できる可能性はほとんどないように思われた。それで、夫のジャック・ストウエルを唯一の友として、彼女は二十歳の時に実社会に出ることになった。若い娘のロマンチックな恋愛という妖しい魅力で感情が高まっていたので、彼しか頼れる人がいない状況では、こうした愛と希望の世界は自分が彼と一緒に装丁される一巻本のロマンスのように彼女には心地よく思えた。

しかしながら、この他愛もない愚かな愛は一ヶ月も続かなかった。結婚した夏の日の夜空で青白い光を放っていた三日月が満ち欠けする間に、彼女は夫婦の契りを結んだ相手の男が飲んだくれのギャンブル狂い、酔った時に暴力をふるう野蛮人、堕ちた女たちと暮らす中で女の貞節な

ど気かけなくなつた放蕩者、自己満足のためだけに生きる男、彼女への愛などは一時の気まぐれにすぎなかつたと思うような、そんな卑劣漢だということが判明した。

すぐさまストウエルは自分が知っている演劇のすべてを彼女に教え込んだ。本物の才能に恵まれていた彼女は、勉強熱心でもあったので、まもなく夫には演劇の知識がほとんどないことに気づいた。彼が伝統的なヒロインたちの習慣や行動について少ししか知らなかつたのに対し、彼女は自分なりの考えを持っていた。夫がどこか場末の飲み屋で酒と賭け事にふけている時に、彼女は夜遅くまで起きて演技の勉強をしていた。悲しみや失望や嫌悪感のあまり、彼女は慰めを求めべく、そして一時的に我が身のことを忘れるべく、自分自身を演技の勉強に駆り立てた。これら悲劇のヒロインたちは、全員みじめな境遇の身だったので、似たような立場にいる彼女にとっては心から共感できるように思えた。実際に舞台を踏む前から演技することが大好きになった理由はそこにあった。

ジャック・ストウエルは妻をリッチ劇場へ連れて行き、契約してもらおうとした。バーバラが普通の女性ならば、舞台監督は一座の端役と週二十シリングの薄給しか与えてくれなかつただろう。しかしながら、彼女の非凡な美しさが舞台監督の目に留まつた。彼の一座には才能ある女優が六名ほどいたが、いずれも容貌が衰えかけていた。この若い娘の美貌は——このイタリア女性のような瞳は——ロンドンの人々を惹きつけるかもしれない、客足が近頃はライバル劇場に傾きかけているじゃないか、と彼は思った。

「いいか、ストウエル」と舞台監督は言った。「できれば奥さんにチャンスを与えたいけど、大衆の心をつかむには主役で登場しなきゃならん。職業柄、演技のイロハを習得してしまうまでは信用できんからな。奥さんにゃ、まずは地方の劇場で自分の能力を發揮してもらふ必要があるぞ」

彼ら夫婦は真っ昼間にコヴェント・ガーデン劇場の大きな舞台に立っていた。しかし、劇場はほとんど真っ暗だったので、亜麻布のカーテンに包まれた大きな半円状の棧敷席は幽霊のように見え、バーバラの心胆を寒からしめた。この巨大な劇場で自分がどんなに小さな人間に思えたことか！ くすんだ下宿の姿見を前にして何度も練習したように、この舞台に立ってジュリエットやモルフィ公爵夫人の悲しみに自分の情熱を注ぐことが自分にできるだろうか？

「ジャック」と、バーバラは一緒に帰路に就きながら言った。今朝からずっと夫は異常なほど彼女に対して優しくかった。「あの大きな、暗くて冷たい劇場を見て、わたし、ホントに恐ろしい気持ちになったわ。自分のお墓の中に立っているみたいなの、そんな気がしたの」

「そりゃね、君がトンマな娘だという証拠さ」と、ジャックは軽蔑したように言い返した。「そんな大きい墓に君を入れようとする馬鹿な奴がいるわけじゃないか！」

ストウエル夫人はバースの王立劇場でデビューし、舞台監督の言葉を借りれば、自分の能力を十分に発揮し、大成功を収めた。持って生まれた情熱が彼女にあることは間違いない。それは議論の余地がない天賦の才能、というか天性のものであったので、経験不足などは問題にならなかった。彼女はこつこつと演技の勉強を続け、心魂を投げうって、この新しい仕事に全身全霊を打ち込んだ。ただひたすら演技のためだけに生きたのである。他にどんな生きる目的があるというのか？ 夫は一週間に三日も四日も千鳥足で朝帰りしていたので、妻への裏切り行為はとっくに知れ渡っていた。

バーバラは翌年の冬にロンドンにやって来て、たちまち都会の観客を心酔させてしまった。彼女が天から授かった才能と美貌、そしてその若さと純潔さはすぐ評判になった。成功を収めた最初のシーズンに、彼女は総理大臣に匹敵するほど多くの手紙を受け取った。しかし、ほどなく

判明したことだが、彼女は人の甘言に簡単に乗るような女ではなかったため、当時の洒落者や浅はかな男たちは次第にまわり付かなくなった。

それでも彼女を愛慕する者や追いかけたがる者は少なくなかった。その中に、彼女が同情を必要としているのに気づき、実際に不憫に思ってくれた男が一人だけいた。それはフィリップ・ヘイズルミアという上流階級の若い資産家——洒落者でも浅はかな男でもなく、教養のある男で熱烈な感情にあふれた人であった。

この新人女優を見た瞬間に彼は見とれてしまい、ほどなく崇拜するようになった。だが、他の男たちとは違い、彼女が理解に苦しむようなしつこい手紙や彼女の名誉を傷つける高価な贈り物でアプローチすることはなかった。一定の距離を保ちながら、沈黙の愛を心がけていた。というのも、彼女が貞淑な女性であることは直感的に分かっていたからである。しかし、彼も生身の男だったので、道義心だけで自分の欲望を抑えることはできなかった。彼はバーバラ・ストウエルの住まいを突き止め、下宿の管理人を買収し、彼女について関係者たちが知らないような情報まで入手することに成功した。

彼が聞いた話によれば、彼女の夫は卑劣漢で妻を虐待しているとのことだった。この絶世の美女は、夜は星のようにキラキラと輝いているが、昼間は悲しみと涙でやつれた、しおれた花のように弱々しい女性だと聞かされた。彼女の過去を知る前から愛してしまったわけだが、知ってしまった現在、その愛はいやが上にも増した。彼女の生活から希望を奪ったものから逆に希望を得たので、彼は道義心をかなぐり捨て、彼女を説き伏せることに決めた。

彼は以下のように自問してみた。あの女性は素性の卑しい道楽者の奴隷になっている。さらには、あんぐり口を開けて見とれている有閑階級の観客たちのお気に入りだ。女性を本来たてまつるべき家庭で夫にさげすまれ、ほったらかしにされている今以上に、彼女の暮らし向きが悪く

なることなどあるだろうか？ 一方、自分は裕福で、しっかりした人間だ——彼女と一緒になれば、明るく楽しい世界が前途に開けそうだ。彼女をイタリアに連れて行き、甘い生活の中で満ち足りた幸せに浸りながら、彼女のためだけに生き、かの地で死ねばいいじゃないか。まだ彼女の手に触れたことも、話しかけたこともないけれど、この六ヶ月というもの彼女の姿を見るためだけに、彼女の声を聞くためだけに生きてきたのではないか。彼女が頭の中で考えている事はすべて、心の中に生じている衝動はすべて、彼には分かるような気がした。彼が舞台脇の特別席で身を乗り出している時や、彼女が劇中の動きの中で近くに来た時など、こちらの存在に気づいたように思える意味ありげな表情で、あの美しい眼が時おり自分の情け深い視線に応じることもあったではないか！

もしジャック・ストウエルが離婚を願い出るようなことがあれば、それは渡りに船だとフィリップは思った。その時は、愛する人をヘイズルミア令夫人にしてやる事ができるし、そうした人生はこの上ない荣誉であることを世間に知らせることができよう。彼はバーバラにぞっこん惚れていたもので、口説き落とすことができれば、それこそ不朽の誉れになるような気がした。当世随一の美女と結婚し、うるわしき公爵夫人と暮らしていること以外は世間にほとんど知られていなかった例のデヴォンシャー公爵のように、自分自身もまた後世まで名を残すことができるだろう。

ある日のこと、サー・フィリップ・ヘイズルミアは勇を鼓して——ジャック・ストウエルの残忍な行為の話聞くことで勇気づけられ——愛する女性の前で自己紹介を試みた。最初、彼女は動揺して機嫌を悪くしたが、やがて彼の深い崇敬の念を知って怒りを鎮めてくれた。バーバラは、本当の愛がいかにか崇敬の念に満ちたものか、いかに謙虚で慎ましいものか、生まれて初めて知ったのである。これは、断りもなく自分の所にやって来るような厚かましい女たらしではなく、自分に同情しながら



も敬意を払ってくれ、相手のためならば血を流すことさえいとわないと思うような男だったのだ。

サー・フィリップは彼女にとって赤の他人ではなかった。今日の今日まで彼の声聞いたことは一度もなかったが、毎晩のように劇場で彼の姿を見ていた彼女は次のように推測した。ころころ変わる当時のレパートリー上演目録において、同じ劇がどんなに繰り返上演されようと、彼がいつも同じ席に釘づけされたように座って観ていた理由は、単なる演劇好きからではなく、何かもっと強い感情があつてのことだろう。

彼女はサー・フィリップの愛に気づいていたし、その真剣な眼差しは彼女の心の琴線に触れていた。今まで善良な男性から愛された経験のない彼女は、彼が一生を捧げると言っているのを聞き、悲惨で絶望的な生活から助け出させてくれるように懇願する彼の控え目な声を聞き、どのような気持ちになったことか！

彼声を聞くとバーバラの心はわくわくした。そうだ、これこそ本物の愛なのだ——これまで受けたことがない人生の素晴らしい恵みなのだ。今となつては遅すぎるが、いかに大切なものを失っていたか、彼女はやっと理解できた。純金と思っていたものが、いかにひどい安びか物だったか、ようやく分かったのだ。しかし、この献身的な恋人が彼女の心に衝撃を与えるたびに、彼女は強く惹きつけられはしたものの、そうした感情は貞淑な妻としての声に常にかき消され、彼に対しては石のように冷たい態度をとってしまった。とはいえ、彼女が恋人の懇願に屈して聞き入れたことが一つだけあった。再会の許可を与えることは拒めなかったのである。時々訪問を受けてもよいけれど、それはまれでなければならない。正直で誠実な妻である自分に敬意を払わなかったりしたら、それは二人が永遠に別れる時になるというのだった。

「わたしの生活はとても淋しいものです」と、彼女は許可を与えてから弁解するように言った。「時たま三十分くらいかせていただき、こ

の気ぜわしい大都會でも同情や関心を示してくださる方がおられると分かるだけで、わたしには慰めになりますわ」

彼女がサー・フィリップの願いを聞き入れたのは理由が一つあったからで、その理由が何であるか推測できていたら、彼は胸が張り裂ける思いをしたことであろう。それというのも、彼女は心の中で自分の命が終わりに近づいていることを自覚していたのである。今この時から墓に入る時まで何かに誘惑される時間はほとんどなかった。彼女はこの世に関する事柄や思いから日ごとに遠く離れて行くような気がした。夫の残虐な行為には前ほど心をさいなまれなくなっていた。ストウエル自身の道徳的な墮落は、以前は彼女にとって最大の心の重荷であったが、今では二人が別々の世界に住んでいるかのように、互いに遠ざかってしまったように思えた。舞台での大成功も、以前は彼女を夢中にさせたが、今では次々と移り行く夢のように現実のものとは思えなかった。脆弱な肉体を悲喜こもごもの現世に縛りつけていた紐は少しずつゆるんでいたのだ。この束縛の紐は彼女の疲弊した肉体からスルツと抜けそうになっていたのだ。

## 第二章 仇討ち

サー・フィリップはバーバラの信頼に値する人物であることを態度で示した。彼が訪れたロンドンのむき苦しい下宿は、この二十年あまり気位の高い墮落した遊び人という流浪の民たちに住まいを提供してきた大きな宿屋で、くすんだ室内の羽目板は貧困の臭いを放っているように見えた。彼が偶像視した女性に手渡したものは何かと言えば、温室栽培の花々とフルーツ、週刊紙、先人たちも喜んで読んだ薄い小雑誌、時には新刊本やロンドンの最新ニュース——ウォルポールがサー・ホレス・マ

ンに書き送った紳士クラブのゴシップ——などであった。彼は<sup>ダンブル</sup>円形枠を使って刺繍している彼女のそばに来て腰かけ、敬意を込めて優しい表情で励ましたので、彼女も気持ちが和らいだ。要するに、彼のおかげで彼女は幸せを感じていたのである。

バーバラの気力がゆっくりと衰えていたにもかかわらず、彼はその変化に気づきもしなかったし、この美しい花が早晩しおれる運命にあるなどとは考えもしなかった。約束を破って彼女と頻繁に会うようになっていたために、その衰弱のゆるやかな進行に気づかなかったのだ。美人薄命と言うが、彼女の病気はその悲運に新たな魅力を加えていた。

ある日、サー・フィリップは恋人の額に恐ろしい切り傷があるのに気づいた。彼女は黒髪のおふわとした長い巻き毛で隠そうとしたが、彼の鋭い眼がその傷跡をとらえたのだ。しきりに厳しく問い詰められ、彼女は辻褄の合わない説明しかできなかった。昨晚、居間から寝室へ移動する際に、ピューッと吹き込んだ風でローソクが消えてしまい、転んだ拍子にタンスの角で怪我をしてしまったというのだ。彼女は顔を真っ赤にし、口ごもりながら事故の説明をした。

「バーバラ、嘘をついてるね！」とサー・フィリップは大きな声で言った。「その傷跡は男が握りしめた拳骨でできたものじゃないか！ あんな奴とはもう一日だって一緒に暮らさせないぞ！」

それに続く彼の熱のこもった懇願に——異国の地での楽しく明るい生活、離婚、新たな結婚、名誉ある地位——といった楽観的な提案に、彼女の心は揺さぶられた。

「でも、その前に不名誉なことが」とバーバラは言った。「恥辱の道が名誉につながるなんてことがあるのでしょうか？ いいえ、サー・フィリップ、たとえ悪から善が生まれようと、悪いことはできません」

恋人のいかなる雄弁をもってしても、彼女の決意をひるがえすことはできなかった。彼女の心はバースの大岩のように堅固だったが、彼の口

調もまた岩に打ち寄せる大波のように激しかった。最後は彼が折れて、暴君のような彼女の夫に対して憤慨しながら立ち去ろうとした。

「神の加護と慰安がありますように！」と、彼は別れ際に叫ぶように言った。「もう二度と会わないよ——君が自由の身になるまではね」

この言葉に驚いた彼女は、その意味をあれこれ考え、不安な気持ちでいっぱいになった。夫に対して何か脅迫めいたことをするつもりだろうか？ 身の危険が迫ったジャック・ストウエルに警告すべきだろうか？

ところで、サー・フィリップ・ヘイズルミアとジャック・ストウエルは、今まで一度も顔を合わせたことがなかった。彼女の夫と鉢合わせする可能性がもっとも低い場所は自宅である。しかし、このとき突然、サー・フィリップはストウエル氏と知り合いになりたい——あるいは、少なくとも彼が絶えず出入りする場所で直に会ってみたいという気持ちに駆られた。そうした場所を見つけるのは難しいことではない。この男は酒と賭け事が大好きで、決まって行く場所はロング・エーカーはずれの狭い路地にあるいかがわしい居酒屋であった。そこでは酒と賭け事が夜の儀式と化し、友だち同士のどんちゃん騒ぎが最後は決まって流血沙汰になっていた。

とある十二月の真夜中ごろ、コヴェント・ガーデン劇場あたりの舗道が雪解けでベトベトになり、<sup>たいまつ</sup>松明持ちの少年たちが褐色の濃霧の中で小銭を稼いでいたとき、サー・フィリップは芝居が終わるとすぐに、秘密を打ち明けることのできるモンタギュー大尉という親友を伴い、その居酒屋に向かった。モンタギューは非常に役に立つ男で、多くの劇場だけでなく、ほとんどの役者——とりわけ、ジャック・ストウエル——についてもよく知っていた。

「いい奴だぞ、最高に」と彼はサー・フィリップに断言した。「付き合っていて面白い男だ」

「そうかもしれんが」とサー・フィリップが言い返した。「奥さんをな

ぐるんだぜ。だから、ぼくが今度はなぐり返してやるつもりだ」

「何だって、フィル！ ドン・キホーテにでもなって風車と戦うつもりか？」

「ぼくのすることに口出ししないでくれ！」とフィリップは答えた。「君はストウエルとぼくを対面させてくれるだけでいいんだ」

二人がストウエル氏を見つけたとき、この男は特定の顔見知りたちと個室で——居酒屋の裏にある小部屋で——銀行というトラップの賭け事に興じていた。そこの窓は鉛板屋根に通じており、夜のお楽しみの最中に身の危険を感じたら、いつでも即座に脱出できるようになっていた。その日の食人種たちは、さながら猫のように窓から険しい屋根に登ったり、屋根の雨どいにぶら下がったりするのが得意だった。

モンタギュー大尉はストウエル氏への取次に名刺を渡し、田舎紳士の友人と一緒に彼の遊びに加わる許可を求めた。ジャックはモンタギューも人食いの仲間であることを知っていたが、その見知らぬ田舎紳士がネギをしょって来たカモであることを嗅ぎとり、「どうぞ、どうぞ」と言っ二人を歓迎した。サー・フィリップは毛皮で縁取った大きなコートと亜麻色のウィッグで変装していたのだが、ストウエルは幾らか怪訝そうな顔で彼をじろじろ見ていた。ストウエルが相手の正体を見抜けなかったのは、ひとえにブランデー・パンチの毒気による悪酔いのせいであった。

トラップ博打はやがて狂乱状態になった。サー・フィリップは田舎の大地主としてパンチ酒をじゃんじゃん気前よく注文し、「どうにでもなれ」と騒ぎながら負けて大金を失い、「夜明けまでには必ず復讐してやるぞ」と叫んでいた。それは一体どういう意味かと思ひながら、モンタギューは興味深そうに相手を眺めていた。

そのように夜が更けて行く中で、紛れもなく泥酔した様子を見せていたサー・フィリップは、酒の影響で大騒ぎしたのち、やがて涙ぼろぼろ

の茫然自失の状態になった。彼がぼんやりした物静かな態度で金を失い続けたので、ジャック・ストウエルは思わず油断してしまった。それで、この遊び人はある策略を思う存分に巡らせた気になったのだが、今のような状況でなければ、それは危険きわまりないと思われる策略であった。

この田舎の大地主が突如として立ち上がり、大きなコップに入ったパンチ酒を顔に浴びせた時の相手の驚きたるや、いかばかりであったろうか。

「おい、みんな！」と、狼狽したストウエルは顔に浴びた酒を拭きながら叫んだ。「この男は酔っぱらってるぞ。みんなも認めるはずだ。実にひどい侮辱を受けたもんだが、オレはこうした事態に便乗するような紳士じゃない。モンタギュー大尉、この友だちは早く連れて帰った方がいいですぞ。千鳥足でもまだ歩けるならばの話ですが——今晚はもう十分に遊びましたから、どうぞ」

「このインチキ野郎！ 詐欺師め！」とサー・フィリップがどなり声で言った。「最後の一時間、貴様が印を付けたトランプで賭けてたことは、ぼくの友人が証言してくれるはずだ。トランプの箱を取り替えてるのをちゃんと見てたんだぞ」

「嘘だ！」とジャックは大声で言った。

「いや、嘘じゃない」とモンタギュー大尉が応じた。「ぼくも君をちゃんと監視してたからな」

「こりゃひどい、みんな！ 決闘を申し込まずにはおくものか！」と大声で叫びながら、ジャックは剣を鞘さやから少し抜いてみせた。

「おお、やってもらおうじゃないか！」とサー・フィリップが言った。「今すぐに。野良犬のように臆病な貴様が、奥さんをなぐる時と同じように、自分の命を守ることができるかどうか、喜んで確かめてやるぜ」

「あっ、お前が誰か、やっと分かったぞ！ 毎晩、舞台脇の特別席に

座って、家内の美貌にかぶりついていた奴だな」

サー・フィリップはドアの所へ行き、錠を下ろして鍵をポケットに入れてから、諸刃の長剣<sup>ラビエール</sup>を抜いて戻ってきた。

モンタギュー大尉と他の男たちは決闘をやめさせようとしたが、サー・フィリップは頑として受けつけず、その場で片を付けると決意を固めていた。ストウエルも酔って癡猛になっており、矢でも鉄砲でも持ってこいといった権幕だった。決闘の下準備が急いでなされた。テーブルがひっくり返され、たくさんのグラスが割れたが、そのような騒音はこうした居酒屋での楽しみに付き物だったので、今回の騒動が階下にいる眠そうな給仕たちの好奇心を呼び起こすことはなかった。

決闘のために何もない空間が作られ、二人の男は面と向かって仁王立ちし、激怒のあまり恐ろしい形相になっていた。サー・フィリップは毛皮で縁取ったコートを脱ぎ捨てるとともに泥酔のふりもやめたが、一方のジャック・ストウエルはアルコールのせいで相当ひどい状態であった。

この大根役者はなかなかの剣の腕前であったが、最初のうちは激しく無闇に突くだけで、何の効果もなかった。サー・フィリップは軽く受け流し、立ったまま軽蔑の笑みを浮かべて宿敵を見ていたので、ストウエルは気も狂わんばかりにイライラした。

「家内を賭けて言わせてもらうが、お前たちがこの猿芝居を二人で企てたのは間違いない」と彼は言った。「悪だくみが着々と進んでたことに、もっと早く気づくべきだった！ 家内が従順で、話し方も可憐だったもんだから、まさか——」

ジャック・ストウエルが発しようとした言葉はそこで途切れてしまった。というのは、フィリップ・ヘイズルミアの剣から第三の構え<sup>ティエルス</sup>で急に放たれた突きが相手の右肺を貫き、永久に沈黙させてしまったからである。

「今朝、貴様の拳骨の跡を奥さんの額の上に見たとき、ぼくは今晚にも奥さんを未亡人にしてやろうと誓ったんだ」——相手の役者が砂をまいた床に顔から倒れると、サー・フィリップはそう言った。

ほどなく居酒屋の給仕たちのドアをたたく音が聞こえた。階下で静かにしていた彼らでさえ、ジャック・ストウエルが倒れる音に驚いたのである。テーブルやグラスがたたき壊されても、普通は何も言われない——壊れた分だけ勘定がふくらむだけの話だった——が、人間の体が倒れたということで注意を引いてしまったようである。モンタギュー大尉は窓を開け、その下のツルツルした鉛板屋根の上に親友を押し出した。急いで降りたので生命と手足に多少の危険を伴ったものの、サー・フィリップ・ヘイズルミアは気がつくやうにロング・エーカーに来ていた。夜の見回りが「四時過ぎ——雨の朝——」と叫んでいた。

### 第三章 虫の息

翌日の夕刻前に、ロンドンの人々は役者のジャック・ストウエルが居酒屋での喧嘩で殺されたということを知った。モンタギュー大尉は「沈黙は金」だと言って、ストウエル氏の友人たちを買収していた。この男は規則に従った決闘で殺されたのだから、その目的の詳細を警察に知らせても何の役にも立たないではないか。それで、中央警察裁判所の治安判事が尋問に来て、この重大事件については支離滅裂な説明しか聞き出せなかった。賭けトランプの最中に喧嘩が始まり、ストウエルとその場にいた誰も名前を知らない別の男とが、それぞれ剣を抜いて戦った。ストウエルが倒れ、もう一人の男は居酒屋の給仕たちが助けに来る前に窓から逃げてしまった。逃げた男は亜麻色の髪の毛で、灰色の毛皮で縁取った深緑の乗馬用コートを着ていたが、逃げる姿を見た者は一人もい



ない。治安判事は全員が酔っ払っていたという総括的な結論を下した。この尋問は徒労に終わったわけだが、昨今であれば日刊紙の抗議社説や、「正義は行わしめよ」とか「ベッカム・ライより」とかいった手紙が抗議の切っ掛けを与えただろうが、のんきな当時のことだから誰の注意も喚起しなかった。ウォルポールの不朽の書簡集に段落を一つ提供するくらいが関の山だった。

サー・フィリップがストウエル夫人の下宿を訪れると、彼女は病気で部屋に閉じこもっていた。コヴェント・ガーデン劇場では出し物の変更が告示されており、この花形役者は「家庭の不幸により一週間後の明日まで」お休みとのことだった。

サー・フィリップはいつもの贈り物としてストウエル夫人の住所に温室栽培のフルーツと花々を送ったが、殺された役者の亡骸が下宿に安置され、若き未亡人が配偶者の壮絶な死のために憂鬱な気持ちになっているということで、控え目で細やかな心づかいから彼女には近づかないようにしていた。おそらく彼女は彼が手を下して夫の時ならぬ死を招いたと疑っているだろう。彼女は哀れに思っただけで赦してくれるだろうか？ 剣を抜いたのは、彼女が受けた虐待に報復するためだったことを理解してくれるだろうか？ この点についてサー・フィリップは楽観的に考えていた。自分たちの将来には希望と期待が持てるに違いない。疑いを受けているから、しばらくの間は関係を断たねばならないが、今はそうした陰鬱な時を耐え忍んでいけばよいのだと思った。

バーバラが病気で部屋に閉じこもっていると考えても、彼はそれほど不安にならなかった。夫の死に動揺して完全に参ってしまったのは当然なのだから。暴君から解放されたことに気づけば、やがて気が楽になって希望を持つだろう。その間、サー・フィリップは彼女が舞台に復帰するまで、あと何日必要かと指折り数えていた。

とうとう彼女が劇場に復帰する夜になった。再演として告示されたの

は『モルフィ公爵夫人』第四幕まで——公爵夫人役はストウエル夫人」で、それはウェブスターの劇である。当時は悲劇が好まれていた時代で、陰鬱な劇であればあるほど結構だった。コヴェント・ガーデンは自殺や殺人の場面を見せるには持ってこいの広い納骨堂のような劇場であった。

サー・フィリップはヴァイオリン奏者たちが演奏を始める前から特別席にいた。花形女優がしばしの休養を経て復帰したにもかかわらず、そして一週間前に謎めいた状況下で死の憂き目に遭った男の未亡人として、彼女が観客の関心を引くように作為的な戦略がとられたにもかかわらず、劇場の半分以上は空席であった。劇場の外はひどい天気——褐色の濃霧だったからである。霧の一部はコヴェント・ガーデン劇場の出入口から中に忍び込んでおり、棺桶にかける黒布のように一階席や特別席に垂れこめていた。

ヴァイオリン奏者たちはグルックの『オルフェオとエウリディーチェ』の序曲を演奏し始めた。フィリップ・ヘイズルミアの心臓の鼓動が大きく速くなった。カーテンが早く上がらないかと待ち焦がれ、じれったい気持ちを抑えることができなかった。もう一週間以上もバーバラ・ストウエルの姿を見ていない。最後に会ってから二人の運命に、なんと劇的な変化が起こったことか！ 今なら意気揚々と喜んで彼女に会うことができる。二人の仲に水を差す大きな溝はもはやない。彼女が愛してくれていることも、こちらの願いを喜んで受け入れてくれることも間違いない。ほんのしばらくの時間——世間が納得するために一定の時間——が経てば、彼女は妻になってくれるはずだ。ロンドンの観客が、こうしてギラギラ光る照明の下で、彼女の姿を見ることはもう金輪際ないだろう。これからも彼女は星として輝くだろうが、それは天国のように穏やかな自分の家庭の中だけである。空席が目立つ劇場と黒いマントのように垂れこめた霧が生み出す憂鬱な思いは、そうした明るい未来の予想図によ

って追い散らされた。

カーテンが上がり、とうとう彼女の姿が見えた。美しい眼は前よりも光かがやいていたので、その青白い頬がやせこけているのに彼は気づかなかった。彼女の表情はどれもゾクゾクするような悲劇性を帯びて、それは天才だけが放つ香気と情熱によるものに見えた。舞台に立って千辛万苦の過去を吐露している人物は、無情で残忍な男たちから虐待と抑圧を受けた、罪のない無力な犠牲者であった。なじみのない話、なじみのない人物であっても、彼女の解釈によってどれも自然に見えた。サー・フィリップは、この陰鬱な劇を（実際、台詞はすべて聞き慣れたものであったが）一度も観たことがないかのように、全身全霊を傾けて見入っていた。モルフィ公爵夫人はバーバラが独自に解釈して創造した役柄の中でも最高の部類のものだった。

サー・フィリップは彼女が発する言葉にうっとりしながらも、一語たりとも聞き洩らすまいと集中し、青白い顔をした彼女の美しさを食い入るように見つめていたが、劇が早く終わることを同時に待ち望んでいた。彼は舞台脇のドアの所で待ち伏せし、彼女のお伴をして下宿へ戻るともりである。そして、自分たちの幸せな将来について語り、黒の喪服の片づけが済み次第すぐに結婚するという約束がもらえるまで一緒にいるつもりであった。彼女のためなら根拠のない世間の偏見ですら敬意を払おう、彼女を虐待した夫に対する形式的な服喪の間はじっと待っていようと思った。

劇はゆっくりと進行し、最後の恐ろしい第四幕では恐怖の場面——狂人たちが踊り騒ぐ仮面劇、墓職人、弔鐘を鳴らす男、葬送歌、棺桶と絞首紐を持った死刑執行人たちの場面——が陸続と展開された。バーバラの顔は亡霊のように青白く、影のように淡く見え、この世の束縛から逃れてしまっただけで死などには恐怖を感じない人間のものであった。劇場の客はまばらであったが、カーテンが降りる時には拍手喝采の嵐が起こった。

今にも死にそうな彼女の顔を見たサー・フィリップはその場に釘づけとなり、立ったまま濃緑の虚空を見つめていた。他の観客たちは薄暗がりの中で道案内してくれる松明持ちの少年や貸し馬車を見つけられるかどうか心配しながら、急いで劇場から出ようとしていた。

サー・フィリップは突然すぐ背後で溜息——彼がギョッとし、悪寒を覚えるような溜息——が聞こえたので振り向いた。そこに立っていたのはバーバラだった。あの最後の場面で着ていた衣装——痛ましくも彼に死を連想させる経帷子きょうかたびらのような衣装——を着たままであった。彼女は悲しく訴えるような仕草で両手を彼に差し出してきた。彼は真剣な表情で身を乗りだし、両手で握りしめようとしたが、彼女は身を震わせて後ろへ退き、舞台の戸口の陰で幽霊のように立っていた。

「いとしいバーバラ！」と、彼は驚きと喜びの中で叫んだ。「ぼくは舞台脇のドアまでやって来たんだよ。君はもう自由にぼくを世界一幸福な男にできるんだ。一刻も早く君と話がしたい。愛を確かめたくてたまらないよ。ねえ、君、甘い言葉で話したいことがたくさんあるんだ。そばに行ってもいいよね？ 君の馬車に乗って一緒に帰宅してくれるかい？」

このように彼が真剣な表情で息もつかずに話していると、突如として照明が消えた。もう一度、彼女は前よりも小さな、半ば哀れを誘う、半ば愛情のこもった溜息をついて、彼のそばから去って行った。彼女は一言も発してくれなかったが、この優しい沈黙を彼は承諾の証しとして受け取った。

サー・フィリップは手探りで真っ暗な劇場から出ると、ぐるりと劇場の楽屋口まで回って行った。そして、その出入口には立たず、バーバラの馬車が呼ばれるまで、慎重を期して狭い通りの反対側で待っていた。これまで何回も彼女の出待ちをむなしく漫然としながら夜を過ごした経験があるので、彼女の行動についてはよく知っていた。

夜霧のカーテンにおおわれた街路には二台の貸し馬車が待機していた。ほどなくメラメラ燃える松明を持った一人の少年が急ぎ足でやって来たかと思うと、それに続いて褐色のコートを羽織って同じ色のウィッグをつけた紳士が息を切らして現れた。松明持ちの少年は道路を横切り、その後を紳士が追いかけて、二人とも劇場の中に姿を消した。

息を切らした紳士は何の用があるのだろうかとサー・フィリップは何気なく思った。

彼はしばらく待っていたが、イライラしていたので非常に長い時間に思えた。それでもなお、ストウエル夫人の貸し馬車を呼ぶ声はかからなかった。役者の一団が外に出て、何か熱心に話しながら、反対側の舗道を歩いて行った。それから褐色のコートを着た紳士がまた出てきて、松明持ちの少年に先導されながら、小走りで霧の中へ消えて行った。劇場の楽屋口の守衛が敷居の所に姿を現わし、通りの左右を見渡してから、ほの暗いオイル・ランプを消して夜の戸締りをしているように見えた。サー・フィリップ・ヘイズルミアは走って通りを渡り、なんとか守衛を呼び止めることができた。

「どうして戸締りするのかね？ ストウエル夫人はまだ劇場から出てないんだろ？」

霧の中で彼女の姿を見失った可能性は十分にあった。

「そうじゃね、かわいそうに、明日まで出てくることはねえが、明日になりゃ、足から先に運び出されなさるぞ」

「何だって！ どういう意味だ？」

「あんな別嬪べっぴんさんにとっちゃ、悲しすぎる最期じゃった」と、守衛は溜息まじりで答えた。「あの獣のような旦那の虐待が原因だったんじゃ。そうに違いねえ。この三ヶ月というもの、別嬪さんは肺の病で具合が悪かったんじゃ——あっしら、みんな知ったよ。今晚、この楽屋口に来なすった時にゃ、舞台よりか棺桶にふさわしい顔色ですぜって、そう

言ったんじゃがね、わしは。で、カーテンが降りた瞬間にボタンと倒れなすった。唇から一筋の細い血がにじみ出とったよ。白い衣装にポタポタしたたってた。化粧部屋へ運ぶ時にゃ、もう事切れていなすったよ。ヘンリエッタ通りのバッド医師を呼びにやったんじゃが、もう遅すぎた。医者たちが救い出そうにも、それが待てなかつたんじゃね」

そうだ、サー・フィリップが彼女の幽霊のような顔をのぞき込み、あの悲しそうな眼が口では言い表せない愛と憐れみを込めて彼の眼を見つめているのに気づいた時に、バーバラの苦難に満ちた魂は天高く飛び去っていたのである。

#### 【原典】

Mary Braddon, “Her Last Appearance” (*Belgravia Christmas Annual*, 1876).